

保育学初学者が子どもに抱くイメージの構造

林田 りか¹⁾・中 淑子²⁾

Structure of Image that the Beginner of Nurse's Students Holds in Children

Rika HAYASHIDA and Yoshiko NAKA

要 約

保育学初学者に対する教育内容の構築や教育方法を検討し、小児看護学初学者との類似点および相違点を探る目的で、福岡県内の4年生保育・教育系大学と保育系短期大学の1～2年生(294名)を対象に子どもに対するイメージ調査を行った。その結果、①対象者の平均年齢は18.8歳であり、兄弟人数は3人以上、長子が多かった。②対象者が抱く子どもの年齢では、「幼児期」が最も多かった。③保育学初学者は小児看護学初学者と比べて、多くの接触体験をもっていた。④対象者が子どもに抱くイメージの構造は、「接触因子」や「好感因子」など肯定的なイメージ6因子で構成されていた。⑤遊びを通して子どもへの接触体験を多くもつもの、主に生活援助を体験したものは子どもに対して良いイメージをもちスムーズに関わることができると考えられる。以上のことから、子どもとの接触体験の多さが初学者の子どものイメージ形成につながり子どもの理解に大きく影響することがわかった。子どもとの接触体験が少ない初学者に対しては、ありのままの子どもの姿をみせ、多角的に子どもを理解できるような教育内容の構築を行う必要がある。

キーワード：初学者、子どものイメージ、接触体験、保育学、小児看護学

はじめに

女性の社会進出や時代の流れにより、母親の仕事の継続や核家族の増加が起り、子どもとその親を取り巻く環境は近年、大きく変化している。それに伴い保育者には、子どもたちの心身の健やかな成長を支えるだけでなく、家族の支援や地域の子育て環境づくりをも考えることが求められるようになった。小児看護学においても同様で、健康障害をもつ子どもたちを含めた家族支援が医療従事者には求められている。そのため、子どもに携わる職種を目指す学生に対し子どもを理解させるには、学生がどのように子どもを認識しているかが重要となる。これまでに子どものイメージに関する研究は、数多くなされてきた。しかし、その大半は看護学生を対象としたものである^{1)~4)}。われわれも以前「小児看護学初学者」を対象に子どものイメージ調査を実施した⁵⁾。その結果、学

生が抱く子どもの特徴をとらえることができ、小児看護学教育の構築に役立てている。

今回は、保育学初学者における子どもの理解の程度を知るために、保育学生が持つ子どものイメージや接触体験を調査した。そして、看護学生との比較を行い、教育的配慮内容の類似点や相違点を探る一資料として報告する。

<用語の定義>

保育学初学者：大学および短期大学にて子どもに関する教育を学んでいない保育学生。

I. 研究目的

保育学生の子どもの関心や子どもへの接触体験の実態を通して、子どもに抱いているイメージを明らかにする。そして、小児看護学初学者との類似点及び相違点を探り、今後の教育内容

1) 県立長崎シーボルト大学

2) 元県立長崎シーボルト大学

の構築や教育方法に役立てる。

Ⅱ. 研究方法

1. 調査対象

福岡県内の4年生保育・教育系大学1校と保育系短期大学2校の1～2年生に在籍する、研究協力が得られた学生318名を対象とした。

2. 調査期間

平成19年4月

3. 調査方法

各学校の授業終了後に質問票を配布し、記入後その場で回収した。質問票は、①学生の属性、②子どもへの接触体験の有無、③子どもへのイメージなどで構成した。

4. 分析方法

対象者の属性には単純集計、質問票の妥当性には因子分析、信頼性の検討にはCronbachの α 係数を用いた。また、因子分析にて抽出された因子得点を用いて、対象者の属性と接触体験項目などの群別比較を行った。データ解析には、統計パッケージSPSS11.0Jを使用した。

5. 倫理的配慮

対象学生には、今回得られた結果は今後の教育上の資料にすること、解析は集団として行うもので個人としては特定できないこと、協力を拒否しても学習上の評価には影響がないことを調査前に説明した。回答は、プライバシーに配慮した無記名自記式調査を行った。

Ⅲ. 結果

1. 調査の結果

1) 有効回答率

回収した人数は318名であり、そのうち有効回答を得られたのは294名(82.5%)だった。

2) 対象者の属性(表1、図1・2)

対象の平均年齢は18.8歳(標準偏差1.0歳)であり、その中でも最年少は17歳、最年長は31歳であった。性別では女子が92.9%と対象のほとんどを占めていた。兄弟人数では3人以上が55.8%と最も多く、兄弟順位では長子が48.0%であった。子どもとの交流では79.6%の学生が「大いにある」と答え、16.3%が「時々ある」、「ない」と答えた学生は3.7%であった。子ども時代の遊びの頻度では「大いに遊んだ」と答えたものは73.1%、遊び場では「戸外と屋内の両方」のものが66.7%と最も多かった。遊び仲間の人数では5人前後が

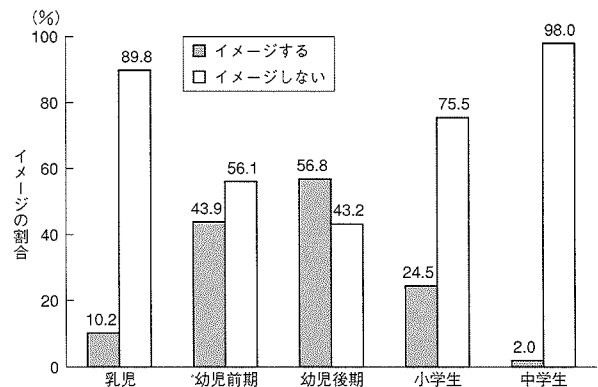


図1 学生が抱く子どもの年齢

表1 対象者の属性

項目	人数	%	項目	人数	%
学校別	A 大学	80 (27.2)	子ども時代の遊びの頻度	大いに遊んだ	215 (73.1)
	B 短大	85 (28.9)		まあ遊んだ	71 (24.1)
	C 短大	129 (43.9)		ほとんど遊んでいない	2 (0.7)
		無回答		6 (2.0)	
年齢	21歳以下	288 (97.9)	子ども時代の遊び場	戸外	85 (28.9)
	22歳以上	6 (2.1)		屋内	12 (4.1)
性別	女子	273 (92.9)		両方	196 (66.7)
	男子	21 (7.1)		無回答	1 (0.3)
兄弟人数	1人	7 (2.4)	遊び仲間の人数	5人前後	221 (75.1)
	2人	123 (41.8)		2～3人	70 (23.8)
	3人以上	164 (55.8)		1人	2 (0.7)
兄弟順位	長子	141 (48.0)	無回答	1 (0.3)	
	中間子	59 (20.1)	小児領域で働く意思	ある	262 (89.1)
	末子	93 (31.6)		ない	24 (8.2)
	無回答	1 (0.3)		無回答	8 (2.7)
子どもとの交流	大いにある	234 (79.6)			
	時々ある	48 (16.3)			
	ない	11 (3.7)			
	無回答	1 (0.3)			

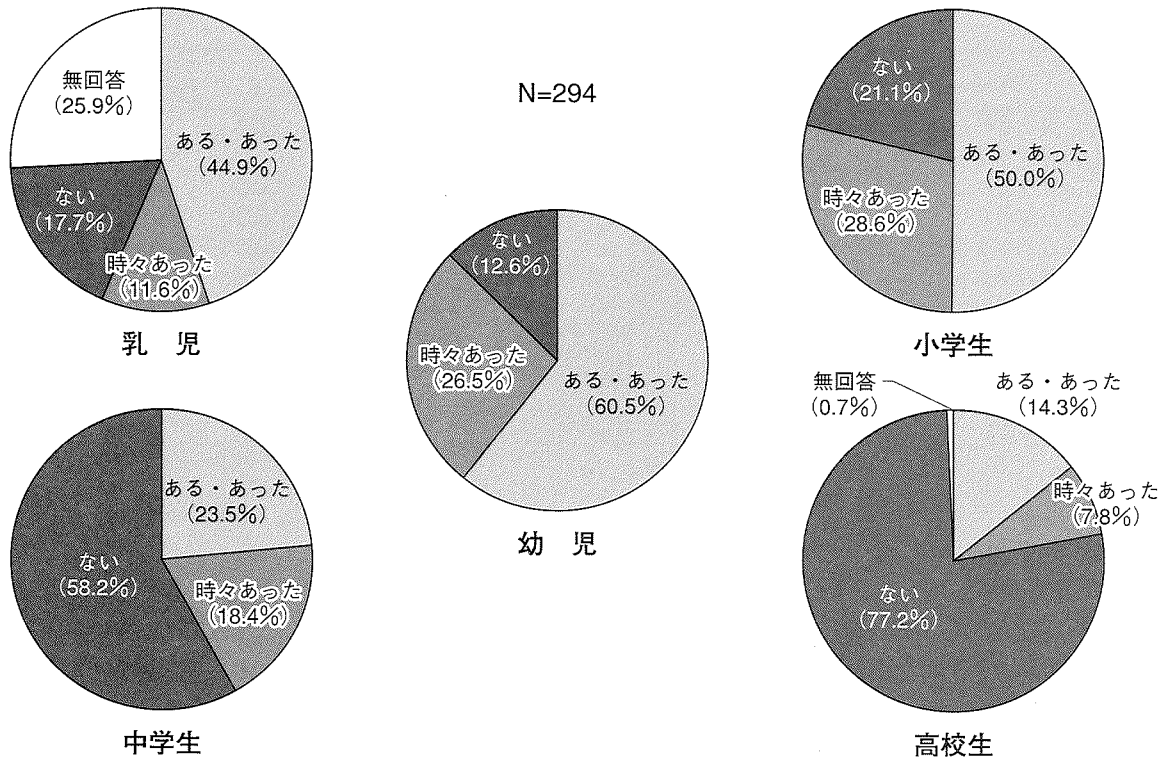


図2 子どもの面倒を見る機会の有無

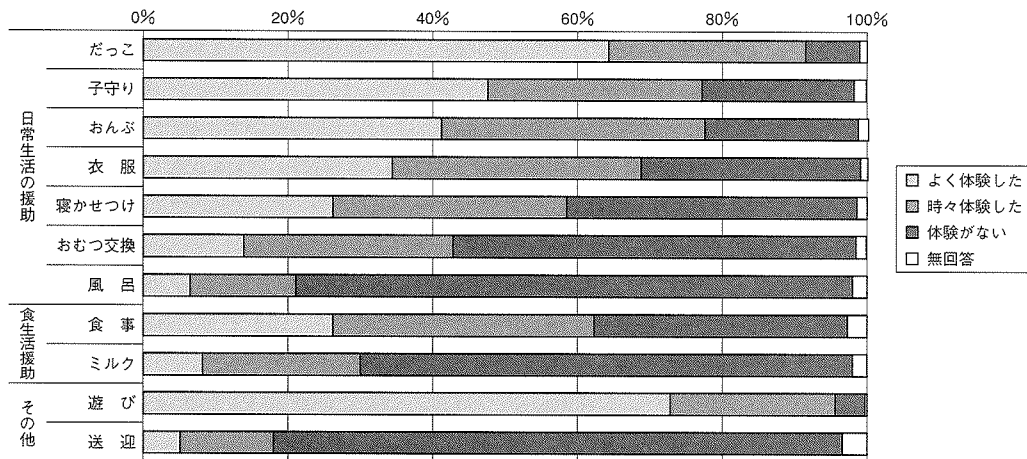


図3 接触体験

最も多く75.1%であり、次いで2～3人の23.8%であった。将来、小児領域で働く意思があるかとの質問では「ある」と答えた学生は89.1%であった。学生が抱く子どもの年齢では、幼児後期をイメージした学生が56.8%と多く、次いで幼児前期の43.9%、小学生は24.5%であった。子どもの面倒をみる機会の有無では、幼児の面倒をみる機会が「ある・あった」と答えたものが60.5%と最も多く、次いで小学生50.0%、乳児44.9%、中学生23.5%の順であり高校生は14.3%と少なかった。

3) 接触体験 (図3)

日常生活援助、食生活援助、その他の3領域にわけて、学生におけるこれまでの子どもへの接触状況を調べた。日常生活援助では“だっこ”、“子守り”、“おんぶ”、“衣服の着脱”、食生活援助では“食事介助”、その他では“遊び”が60%以上の高い体験率を示した。一方、体験率が最も低かった項目は“送迎”であった。

2. 因子と信頼性の検討

1) 因子の検討 (表2)

学生が抱く子どもイメージについて因子分析を行った。その結果、累積寄与率41.8%で6因子が

表2 因子の構造

質問項目	因子命名					
	F1 接触因子	F2 好感因子	F3 自己中心的因子	F4 個性因子	F5 遊び因子	F6 生命力因子
*38. 子どもに接するのに怖いと感じる	0.689	-0.028	-0.105	0.232	-0.121	0.035
*39. 子どもは苦手である	0.685	-0.267	-0.063	0.068	0.028	0.013
*35. 一緒にいると疲れる	0.671	0.119	0.077	-0.049	-0.167	0.075
*31. 接し方がわからない	0.658	0.058	-0.021	-0.031	-0.036	0.119
*37. 一緒にいるとうるさい	0.643	0.009	0.186	-0.032	-0.144	-0.024
*40. 子どもは嫌いである	0.476	-0.274	-0.082	0.164	0.176	-0.136
*43. 子どもには説明してもわからない	0.423	0.104	0.113	-0.250	0.266	-0.102
34. 一緒にいると楽しい	0.044	0.995	-0.053	0.099	0.036	-0.113
33. 子どもは好きなほうである	-0.010	0.881	0.015	-0.003	-0.044	-0.057
36. 一緒にいるとおもしろい	-0.080	0.608	-0.033	0.246	0.058	-0.002
1. かわいいと感じる	-0.022	0.457	-0.020	-0.037	0.109	0.171
14. よく泣く	0.051	0.022	0.622	-0.056	0.118	-0.023
13. 未熟である	0.008	-0.011	0.610	-0.073	-0.039	0.038
11. 自分本意である	0.099	0.001	0.574	0.102	-0.061	-0.097
20. 気分が変わりやすい	-0.038	-0.112	0.550	0.125	-0.009	-0.013
10. わがままである	0.090	0.050	0.538	-0.089	0.005	-0.092
9. 無防備である	-0.092	-0.027	0.522	0.116	-0.007	0.109
12. 小さい	0.066	0.052	0.513	-0.045	0.098	0.065
19. 感情がハッキリしている	-0.208	-0.113	0.409	0.150	0.085	-0.046
24. 子どもなりの意思を持っている	0.001	0.089	0.028	0.591	-0.112	0.139
23. 同じ年齢でも人によって違いがある	0.010	0.116	0.137	0.556	-0.182	0.095
29. たくましさがある	0.118	-0.021	-0.054	0.539	0.212	-0.072
28. 想像力がある	0.027	-0.038	0.029	0.433	0.226	0.107
30. かわいいと思う	0.024	0.143	-0.013	0.433	0.199	-0.173
26. よく遊んでいる	-0.003	0.070	0.010	-0.025	0.566	0.168
7. 正直である	-0.119	-0.087	0.069	0.095	0.493	-0.010
25. 遊びが大好き	-0.027	0.151	0.009	0.012	0.484	0.044
6. 素直である	-0.172	-0.012	0.022	0.079	0.411	0.051
3. エネルギッシュだと感じる	0.029	-0.074	0.015	0.022	0.083	0.795
2. 生き生きとしている	0.143	0.194	-0.036	-0.070	0.108	0.597
4. 可能性があると思う	0.002	-0.130	-0.042	0.109	0.031	0.516
寄与率	17.55	8.86	5.60	3.10	3.15	2.77
累積寄与率	17.55	26.41	32.01	35.91	39.06	41.83
Cronbach の α 係数	0.80	0.87	0.77	0.66	0.65	0.66

因子抽出法：主因子法 回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

*は逆転項目

抽出された。第1因子は「子どもに接するのに怖いと感じる」「子どもは苦手である」「一緒にいると疲れる」「接し方がわからない」など全て逆転項目であり、子どもへの接触に関する内容で構成されているため『接触因子』と命名した。第2因子は「一緒にいると楽しい」「子どもは好きなほうである」など、好意的な感情を示しているため『好感因子』と命名した。第3因子は「よく泣く」「未熟である」「自分本意である」など子どもの自己中心的な特性を示しているため『自己中心的因子』と命名し、第4因子は「子どもなりの意思を持っている」「同じ年齢でも人によって違いがある」など子どもによって違う個性をあらわしているため『個性因子』と命名した。第5因子は「よく遊んでいる」「正直である」「遊びが大好き」など遊びに関する内容が多いため『遊び因子』と命

名し、最後に第6因子は「エネルギッシュだと感じる」「生き生きとしている」「可能性があると思う」など子どもの生きる力を表現しているため『生命力因子』と命名した。

2) 信頼性の検討 (表2)

信頼性の検討を行うため、因子ごとに Cronbach α 係数を求めた。第1因子から第3因子までは0.75以上の許容水準を示したが、第4因子から第6因子までは0.5以上の保留水準を示した。

3. 群別因子得点の平均値の比較

対象者の属性と因子との関係、および接触体験と因子との関係を検討するため、因子得点を使って平均値の差の検定を行った。

表3 対象者の属性と因子の関係

因子名		F1	F2	F3	F4	F5	F6
属性	接触因子	好感因子		自己中心的因子	個性因子	遊び因子	生命力因子
	学校別	A大学<B短大* (-.56) (.29) A大学<C短大** (-.14) (.29)	A大学<B短大** (-.38) (.07) A大学<C短大** (-.38) (.19)		A大学>B短大<C短大** (.002)(-.26)(.17)	**A大学<B短大<C短大** (-.17)(.24)(-.05)	A大学<B短大 (-.26) (-.01) A大学<C短大** (-.26) (.17)
性別							
子ども時代の遊び場所							
子どもとの交流							
子ども時代の遊びの頻度	遊んだ>まあ遊んだ** (.31) (-.11)	遊んだ>まあ遊んだ** (.17) (-.42)			遊んだ>まあ遊んだ* (.08) (-.21)	遊んだ>まあ遊んだ** (.11) (-.03)	遊んだ>まあ遊んだ** (.13) (-.31)
子ども時代の遊びへの関心							
子どもの面倒をみる機会	乳児			あった>なかった* (.04) (-.26)			
	幼児	あった>なかった** (.37) (-.06)	あった>なかった* (.07) (-.47)				
	小学生						
	中学生						
	高校生		あった>なかった* (.19) (-.05)				

*p<0.05 **p<0.01

表4 接触体験と因子の関係

因子名		F1	F2	F3	F4	F5	F6
属性	接触因子	好感因子		自己中心的因子	個性因子	遊び因子	生命力因子
	日常生活の援助	おんぶ	体験した>体験がない* (.20) (-.06)	体験した>体験がない** (.11) (-.33)			体験した>体験がない** (.09) (-.32)
抱っこ		体験した>体験がない* (.42) (-.04)	体験した>体験がない** (.07) (-.68)				
おむつ交換		体験した>体験がない* (.11) (-.02)	体験した>体験がない** (.17) (-.10)				
お風呂		体験した>体験がない* (.05) (-.22)		体験した<体験がない* (-.20) (.05)			体験した>体験がない* (.19) (-.05)
衣服の交換		体験した>体験がない** (.24) (-.12)					
子守り							
寝かせつけ							
食生活援助		ミルク		体験した>体験がない* (.17) (-.05)			
	食事	体験した>体験がない** (.23) (-.14)	体験した>体験がない* (.11) (-.16)				
その他	遊び	体験した>体験がない* (.52) (-.03)			体験した>体験がない* (.03) (-.47)		
	送迎		体験した>体験がない* (.21) (-.03)	体験した>体験がない* (.23) (-.05)			

* p<0.05 ** p<0.01 ()は平均値

1) 対象者の属性と因子の関係 (表3)

学校別では、第1因子と第2因子においてB・C短大のほうがA大学より因子得点が高く、子どもに対してうまく接触でき、好感が持てるととらえていた (p<0.05, p<0.01)。また、第4因子と第6因子においてB短大のほうがA大学より因子得点が高く、子どもは個性的であり、生命力にあふれているととらえていた。子ども時代の遊びの頻度では、第1因子、第2因子、第4因子、第5因子、第6因子において「遊んだ」ほうが「ま

あ遊んだ」ものより因子得点が高く、子どもを肯定的にとらえていた (p<0.05, p<0.01)。子どもの面倒をみる機会の有無では、乳児に関しては第3因子で面倒をみる機会が「あった」ほうが「なかった」ものより因子得点が高く、子どもを自己中心的にとらえていた (p<0.05)。幼児に関しては、第1因子と第2因子において機会が「あった」ほうが「なかった」ものより因子得点が高く、子どもに対してうまく接触でき、好感が持てるととらえていた (p<0.05, p<0.01)。高校生に関し

表5 因子の構造 (看護学生)

	F1	F2	F3	F4	F5	F6
	愛着因子	発達因子	脆弱因子	お利口因子	生命力因子	遊び因子
質問項目数	8項目	8項目	4項目	2項目	2項目	3項目
寄与率	25.32	11.28	5.34	4.71	3.32	2.45
累積寄与率	25.32	36.60	41.95	46.67	49.99	52.44
Cronbachのα係数	0.88	0.80	0.72	0.74	0.82	0.81

因子抽出法：主因子法 回転法：Kaiserの正規化を伴うプロマックス法

では、第2因子において面倒をみる機会が「あった」ほうが「なかった」ものより因子得点が高く、好感が持てるにとらえていた ($p<0.05$)。

2) 接触体験と因子の関係 (表4)

(1) 日常生活の援助

“おんぶ”の体験は第1因子と第2因子、第5因子において「体験した」ほうが「体験がない」ものより因子得点が高く、子どもに対してうまく関わることができ、子どもは遊びが好きな好感が持てる存在だととらえていた ($p<0.05$, $p<0.01$)。

“抱っこ”や“おむつ交換”の体験は第1因子と第2因子において「体験した」ほうが「体験がない」ものより因子得点が高く、子どもに対してうまく関わることができ、好感を持っていた ($p<0.05$, $p<0.01$)。“お風呂にいれる”体験は第1因子と第6因子において「体験した」ほうが「体験がない」ものより因子得点が高く、子どもに対してうまく関わることができ、生命力がある存在だととらえていた ($p<0.05$)。一方、第3因子においては「体験がない」ほうが「体験した」ものより因子得点が高く、子どもに対して自己中心的であるととらえていた ($p<0.05$)。“衣服の交換”は第1因子において「体験した」ほうが「体験がない」ものより因子得点が高く、子どもに対して好意的に接触していた ($p<0.01$)。

(2) 食生活の援助

“ミルクを飲ませる”体験は第2因子において「体験した」ほうが「体験がない」ものより因子得点が高く、子どもに対して好感を抱いていた ($p<0.05$)。“食事の援助”は第1因子と第2因子において「体験した」ほうが「体験がない」ものより因子得点が高く、子どもに対してうまく関わることができ、好感を抱いていた ($p<0.05$, $p<0.01$)。

(3) その他

“遊び”の体験は第1因子と第4因子において「体験した」ほうが「体験がない」ものより因子

得点が高く、子どもに対してうまく関わることができ、子どもを個性的にとらえていた ($p<0.05$)。

“送迎”の体験では第2因子と第3因子において「体験した」ほうが「体験がない」ものより因子得点が高く、子どもに対して好感を抱き、子どもを自己中心的であるととらえていた ($p<0.05$)。

IV. 考 察

保育学として求められている教育内容は、小児看護学教育と同様に幅広く特殊性に富み、子どもの発達段階に応じた適切なかわりを教授するものである。保育学教育も学習目標にそって学習効果が得られるような講義内容や演習等を検討して行っていく必要がある。

今日の短期大学および4年大学の学生は、子どもに対する理解という面では多くの困難な要因があると考えられる。これは核家族化や少子化が進み、幼少期からの生活体験が乏しく子どもとの触れ合いが少ない環境下に育ってきたからである。今回の結果では、兄弟人数が2～3人以上の学生が97%以上を占めており、1人っ子は3%に満たなかった。対象学生が出生した昭和60年ごろの全国の合計特殊出生率を調べると1.76であり、現在より若干高めであった。また、今回の調査地域である福岡県の合計特殊出生率(平成17年度)は1.26であり、平成17年度の全国平均と変わらなかった⁶⁾。これより、今回調査した地域では全国よりは少子化が進んでいないことが推測される。子ども時代の遊びの頻度では、97%の学生が「遊んだ」と答えており、遊び仲間の人数も「5人前後」が最も多く75.1%であった。幼少期の環境としては、同年代の子どもが多く、恵まれた中で育っていることが示唆された。

1. 子どもに対するイメージ年齢について

保育学初学者がもつ子どものイメージ年齢は幼

見期の子どもの多く、全体の90%以上を占めていた。幼児期は一般的に人懐っこさから愛着がわきやすく、かわいらしいとか何かをしてあげたいという感情を強く持ちやすくなる。逆に、乳児と小・中学生に関しては実際に何かをしてあげたり、一緒にしたりすることが少ないため、子どもに対するイメージ年齢として割合が高くなかったと考える。幼児の面倒をみる機会が「ある・あった」もしくは「時々あった」と答えた学生は、全体の約90%を占めており、次に小学生78.6%、乳児56.5%、中学生41.9%、高校生22.1%の順だった。看護学生の調査結果では⁹⁾、幼児の面倒をみる機会が「ある・あった」もしくは「時々あった」と答えた学生は、全体の約70%を占めており、次に乳児68.6%、小学生66.3%、中学生39.0%の順だった。保育学生の特徴として幼児の面倒をみる機会が多く、逆に乳児の面倒をみる機会が少ないことがわかった。

2. 接触体験について

接触体験の程度を細分化して「よく体験した」「時々体験した」「体験がない」の3段階で比較した。「よく体験した」と答えた学生が多い項目は、日常生活の援助の“だっこ”とその他の“遊び”であった。また、「体験した」割合が60%を超えた項目は、“だっこ”、“子守り”、“おんぶ”、“衣服の着脱”および“食事の援助”や“遊び”に関することであった。これらの項目は、子どもと学生がある程度コミュニケーションがとれる段階で楽しめる内容である。逆に“おむつ交換”、“お風呂に入れる”、“送迎”はその場での判断や専門的な技術に加えて安全性が必要となる援助内容である。そのため、体験することに戸惑いを感じ、不安が大きくなるために体験が困難になったのではないかと考える。看護学生を対象とした調査結果と比較すると⁹⁾、保育学生のほうがあらゆる援助内容を「よく体験した」と答えており、特に“抱っこ”と“遊び”については看護学生より約35%多かった。子どもと遊びながら子どもへの接し方や日常生活援助の方法を覚えていくため、子どもとの接触体験を多くもつことができるよう、学生に対し多くの機会を作ることが必要であると考えられる。

3. 因子と信頼性の検討について

学生が抱く子どもイメージについて因子分析を行った。想定される子どもの年齢は前述したよう

に、幼児を中心としたイメージであることが伺える。因子分析の結果では、6因子が抽出された。全ての因子が肯定的イメージであり、保育学初学者はこのような意識構造を描いて子どもの特徴をとらえていることがわかる。第1因子の『接触因子』と第2因子の『好感因子』は、保育学初学者が子どもに抱く気持ちである。したがって、学生は子どもに接することを苦手とせず、好感をもって関わることができると理解できる。第3因子から第6因子までは、幼児の特徴を表している。第3因子の『自己中心的因子』は、まさに幼児の特徴を明確に示している。幼児前期は二足歩行と言語を獲得し、基本的な生活習慣を形成する時期である。身体的自立に伴い、自我の芽生えが明らかになると同時に、養育者や社会の統制に対して反発したり葛藤したりする。幼児後期は自立して生活するための基本的な生活習慣が獲得される。また、全身運動や細かい指先の運動が活発で洗練され、幼児同士の遊びが盛んになる⁷⁾。保育学生の幼児に対する接触体験内容が多かったため、子どもの自己中心的な部分を捉えることができたと考えられる。また、第4因子の『個性因子』や第6因子の『生命力因子』は、『自己中心的因子』と同様に子どもとの遊びを通して理解できるものではないだろうか。第5因子に『遊び因子』が位置しているが、子どもと接するときには根底に遊びがあるなかでさまざまな生活の援助を行っていると考えられる。そのため『遊び因子』が低い位置に抽出されたと推測できる。看護学生の結果では、今回と同様に6因子が抽出された(表5)。その内容は、第1因子「愛着因子」、第2因子「発達因子」、第3因子「脆弱因子」、第4因子「お利口因子」、第5因子「生命力因子」、そして第6因子は「遊び因子」であった。「生命力因子」と「遊び因子」は保育学生と同じであったが、高位にある因子は構造が違っていた。看護学生は子どもに対して愛着をもって接することができるが、保育学生は好意的な感情と子どもに接する技術を持って関わるができることと推測される。子どもとの接触体験率の違いにも関係するが、初学者にとって子どもと接するときには、まずは子どもを苦手とせず好意的な感情をもって接することが重要である。そのためには、子どもへの肯定的な感情と安心感を抱かせる授業展開を行う必要がある。

4. 群別因子得点の平均値の比較について

対象者の属性と因子との関係、および接触体験と因子との関係を検討するため、平均値の差の検定を行った。属性と因子との関係をみると、「1 好感因子、2 接触因子、3 自己中心的因子・個性因子・遊び因子・生命力因子」の順で関係性が多くみられた。子ども時代に多く遊び、幼児の面倒をみる機会があった学生ほど、子どもに対し強く好意的な感情を持っていた。また、接触体験と因子の関係では、接触体験と『接触因子』および『好感因子』との関係性が高いことがわかる。これは、日常生活や食事の援助、遊びなどを通して接し方を理解し、好意的な感情をもちながら関わることのできるからだと考え。子どもとの触れ合いのなかで、子どもの特徴を肯定的にとらえ生命力あふれる愛らしい存在であることを肌で感じさせることが子どもに携わる職種にとって重要になるのではないだろうか。幼少期から子どもと接する機会を多く持つことは、子どもへのなじみの多さと深さにつながり、保育学初学者の将来の職業選択に重要な要因となる。子どもを偏った視点からではなく、多面的に分析できるような教授内容を今後は考えていく必要がある。

少子化や核家族化が進むなか、子どもと接する機会はますます減少すると考える。小児看護学では、初学者に対し子どもを肯定的に認識させ、どのように受け止めさせるかが重要な課題であるが、保育学においても同様である。子どもとの接触体験が少ない学生には、接することができる多くの場を設け、子どものありのままの姿を見せたうえで生活援助を実施させる必要があると考える。小児看護学のみならず保育学においても効果的な教育内容の構築を検討する必要があると考える。

V. まとめ

小児看護学初学者に引き続き、保育学初学者が抱く子どものイメージと対象の属性や接触体験との関係を検討した結果、以下のようなことがわかった。

1. 保育学初学者は、子どもを幼児として受けとめる傾向がある。
2. 子どもに対する6つのイメージは、子どもの特徴を適切にとらえており、肯定的な因子で構造化されている。

3. 子どもとの接触体験が多いほど、子どもに対し好意的な感情をもち、スムーズに関わることができる。
4. 子どもとの接触体験が少ない初学者には、子どもと接することができる多くの場を設け、子どものありのままの姿を見せたうえで生活援助を実施させる必要がある。
5. 小児看護学のみならず保育学においても効果的な教育内容の構築を検討する必要がある。

謝 辞

本研究の実施にあたり、調査にご協力いただいたA・B・C大学の保育学生の皆様、ならびにご指導いただきました諸先生方に深く感謝いたします。

引用文献

- 1) 高橋由紀子・杉浦浩子・竹内淑子：小児看護実習が学生の子どもに対するイメージ形成に及ぼす影響，岐阜大学医療技術短期大学紀要，7(2)，77-88，2001
- 2) 市江和子：看護学生の子どもに対するイメージに関する研究（その1）－看護学生と保育学生の比較－，日本看護研究学会雑誌，24(3)，391，2001
- 3) 加藤奈保美・内海滉：看護学生の子どもに対するイメージに関する研究（その2）－保母イメージとの関係－，日本応用心理学会論文集，62，2000
- 4) 高橋由紀子・杉浦浩子・竹内淑子：看護学生の子どもに対するイメージと関連要因－学生の背景による比較－，岐阜大学医療技術短期大学紀要，7(1)，21-32，2000
- 5) 中嶋一恵・中淑子・林田りかほか：小児看護学初学者が子どもに抱くイメージの構造，県立長崎シーボルト大学看護栄養学部紀要，第6巻，49-60，2005
- 6) 日本子ども家庭総合研究所：日本子ども資料年鑑2007，KTC中央出版，37-38，2007
- 7) 松尾宣武・濱中喜代：新体系看護学28 小児看護学①小児看護学概論・小児保健，メヂカルフレンド社，154，2006

参考文献

- 1) 松村京子・大路雅子：幼児体験学習時の中学生と高校生の対児行動，小児保健研究，61(3)，489-495，2002
- 2) 松村京子・大路雅子・山口香織：幼児との交流時における高校生の対児行動－対児感情と性別による違い－，小児保健研究，61(1)，66-72，2002
- 3) 林田りか・中淑子・草野美根子：入学前の看護学生の子どもに対する接触および行為体験の実態，県立長崎シーボルト大学看護栄養学部紀要，第3巻，85-91，2002

- 4) 林田りか・中淑子：認可外保育施設で働く保育者
もつ子どもに対するイメージの実態，県立長崎シーボ
ルト大学看護栄養学部紀要，第2巻，65-72，2001